

## 文章・談話研究

星野 祐子

文章・談話の捉え方には様々な立場があるが、それらが現実使用の場における最も具体的な単位であるのは事実である。さて、2011年においても文レベルを超える単位に注目する研究は多くみられた。

まず、文章・談話の領域を語るにあたって外せない出版物は、『日本語 文章・文体・表現事典』(朝倉書店)である。同書には、関連分野の用語解説に加え、各種ジャンルの文体概観、文学作品の鑑賞、関連分野の文献解題など、多岐に及ぶ項目、内容が収められている。

続いて、1. 形式に注目した研究、2. コミュニケーションに注目した研究、3. 会話に伴う非言語行動に注目した研究、の3つの観点に分けて、この領域の研究動向をみてみたい。

まず、形式に注目した研究として、中島悦子『自然談話の文法』(おうふう)を取り上げる。同書では、疑問表現、応答詞、あいつち、フィラー、無助詞といった形式のふるまいが詳細に記述されている。また、同書で取り上げられた項目は、談話研究においてしばしば注目される項目でもあり、例えば、フィラーについては、宮永愛子・大浜るい子「道教え談話におけるフィラーの働き—「あの」に注目して—」『日本語教育』149などがある。また、田中妙子「インタビューにおける質問の展開方法—「つなぎ表現」を焦点として—」『日本語と日本語教育』39では、インタビュアーが回答者の発話を受け、話題を展開する際に用いるマーカの分析がなされている。

続いて、コミュニケーションに関する論考を紹介する。ネットにおける文字言語を媒介としたやりとり注目する研究には、田中弥生『「質問—回答」における待遇表現の特徴—書籍QA、WebQA、Yahoo!知恵袋の比較から』『待遇コミュニケーション研究』8がある。また、ポライトネスに注目する研究も充実しており、この関心においては、谷智子「初対面からの継続的対面データにみる話題のデフォルト化—ディスコースレベルのポライトネスの観点から—」『大阪大学言語文化学』20などがある。さらに、Brown and Levinsonのポライトネス理論として知られる文献が、田中典子監訳『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』(研究社)として日本語訳された。

最後に非言語行動に注目した研究を取り上げる。『社会言語科学』14(1)では「相互作用のマルチモーダル分析」と題した特集が組まれた。例えば、視線配布行動については、榎本美香・伝康晴「話し手の視線の向け先は次話者になるか」といった研究がある。また、実際の会話を対象とするからこそ、音調の研究も可能となる。例えば、梅木俊輔「エコー型聞き返しの発話機能と発話末イントネーションとの関係」『日本語／日本語教育研究』2は、ピッチ変動の詳細な分析を取り入れた実証的な研究を行っている。

今後も、会話者の相互作用過程に出現するマーカの研究、同一テーマまたは同一話者を設定した縦断的・横断的研究、会話に伴う非言語行動の研究、隣接領域の知見を活かした研究の進展が期待される。

(十文字学園女子大学短期大学部)